

谷田貝先生を悼む

高田 友

令和四年二月二十一日、谷田貝常夫先生逝き給ふ。

先生は、福田恆存氏の一番弟子にて、福田氏の後継として、國語問題協議會事務局長、のちに會長を勤めたまふ。かつまた、文語の苑の創立にも加はりたまひ、晩年には副理事長として、文語文の流布を願ひて奮勵せられたり。

溫厚博愛の人にして、かつ博覽強記、歴史的假名遣の復活を事としたまひけるが、加ふるに衰へ行く漢字の再興、およそ失はれつつある傳統表記、延ては敗戦以來危殆に瀕する日本文化全般を守護せんとの志に燃え、これが爲に盡心竭力、生涯を捧げて活動あらせられたり。

一昨年秋より病臥したまひけるが、一年半の闘病つひに恢復せらるることなく、今にして慕情一方ならぬ「協議會」及び「苑」の會員と幽明境を異にするに至り給ひけるは、眞實我儕の慟哭せずんばあらざる所なり。

つらつら思ひ出づるに、先生は漢字の字源と字形とに造詣深くあらせられ、それがし近侍せし始めの頃、我儕同志の間に「強」の字は正字「強」と思はれてあれども、眞は「強」の方、康熙字典に掲載せられたる正字なりと御教示賜はりたる記憶あり。

時恰も卒壽を迎へたまひたるに逝世せられたまふ、豈魂魄留め奉るの由なかりしやとこそは慨嘆せらるれ。

また、先生佛道にも深く精進あらせられ、江ノ島大師・池口惠觀師の許に屢々參ぜらる。加之、其の梵語の學識、何爲此の如きと茲許吃驚せでは已むことなかりき。後生冥加幸ひあるべきの儀必定と存じ奉る。

思ひわび亡き人ゆゑに袖見ればえやはとどむる涙なるらむ

梅が枝に匂ふ初花うぐひすの聲を聞きつつ往にし君はも

(令和四年二月二十七日受附)